

まいど！ざいむ局です！～ 起業家編 ～



関西元気企業

～映写用スクリーン製造一筋にかける情熱「50年の重み」～

今回ご紹介する企業は、京都府八幡市に本社を置き、主に会議や授業、舞台装置などで利用する映写用のスクリーンを製造し、全国へ提供されている株式会社シネマ工房です。

奥村恵一社長は、平成4年に約30年間勤めた映写用スクリーン業界の最大手企業をご退職され、奥様の雅子さんを副社長に、身内ばかりの5人で起業されました。

スクリーン製造業界に50数年。「他社にはないもの」という精神のもと、スクリーン製造一筋に歩んでこられた職人肌の社長に、スクリーン製造へかける情熱の背景について、様々な角度からお話しをお伺いしました。

企業情報

名称 株式会社シネマ工房

所在地 京都府八幡市上津屋石ノ塔70番地

設立 1992年

代表者 奥村 恵一

従業員 40名 資本金 15百万円

H P <http://www.cinema-kobo.com/>

●創業時の状況や軌道に乗るまでの道のりは

平成4年に、枚方市にある50坪の貸工場で創業しました。しかし、大きなスクリーンを製造するには、一定規模の広い土地が必要でした。新たな土地を探していたところ、仕入先の方が教えてくれたのが、現在の本社工場となっています八幡市の「上津屋工業団地」でした。

しかし、八幡市に移転した当時の工場は、現在ほどの規模ではありませんでした。

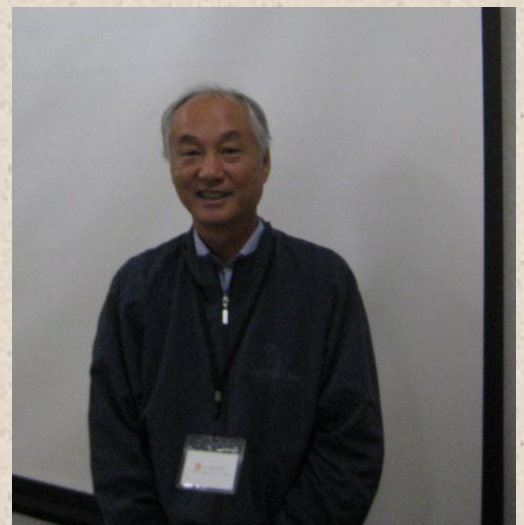
様々な苦労もありましたが、その時の経営体力、経営状況を踏まえながら、決して無理せず少しずつ隣地を購入し、工場を大きくしていきました。

隣地を購入できたのは、所有者から購入を打診されたことでもあります。取引先金融機関の方が色々アドバイスやお世話をしてくださったことが大きかったと思います。当時お世話になった金融機関とは、今もとても親しくお付き合いをさせていただいております。振り返ってみても、とてもいいご縁に恵まれたなと改めて思います。

そして、当社の経営が軌道に乗ったのは、お客様のニーズを大切にし、細かい注文に対応したオーダーメイドの製品を提供してきたからだと思います。

根気よく独自の技術にこだわり、失敗しても諦めずに製造に携わってきました。そうした失敗の経験もノウハウとして蓄積しながら、新たな製品開発に繋げていったことが大きかったと思います。

また、こうした特殊な業界において、50年の経験は非常に大きな財産です。石原裕次郎、小林旭、高倉健ら銀幕のスター達が活躍していた映画館全盛時代（当時は娯楽の種類が少なかったで



株式会社シネマ工房 奥村恵一社長



す) から映画館の映写用スクリーン製造に携わっており、その時に培った技術や経験が今も最新のスクリーン製造に生かされています。

●社長にとってのスクリーン製造とは

スクリーン製造は、プロジェクター（映写機）の進歩に併せて、その性能を最大限に引き出し、よりきれいに映るように進歩させていかなければなりません。このため、立ち止まることなく、常に独自の技術を追求め、チャレンジし続ける必要があります。

当社は生地裁断や縫製など工程の多くを手作業で行っています。昔も今も手づくりにこだわっており、つくり置きはしていません。私は「スクリーンは繊細な生き物」だとの信念を持っています。生き物だからこそ、その時々湿度や気温などに配慮したスクリーンづくりに徹しています。

また、私はデスクワークよりも、製造現場で社員と一緒に汗を流すのが好きです。現場でこそ、私の蓄積してきた技術や経験が最も生かされるものと考えており、こうした技術や経験をできる限り社員に伝えていきたいと思っています。



●近年の製品開発事例は

近年、短い距離で映写可能というメリットを生かした短焦点プロジェクターが普及し始めていますが、当社では、同プロジェクターに対応した「巻上タイプのスクリーン」を開発し、張込タイプのような平面性を実現しました。

簡単に言いますと、これまでのスクリーンでは、短焦点プロジェクターを映写する場合、スクリーン面のわずかな波打ちが大きな歪みとなって映像が乱れましたが、そのような問題点を解決し、風などによる揺れを軽減できる製品となっています。

こうした新製品の開発は、一朝一夕にできるものではありません。製品として世に出るまでは、失敗や試行錯誤の繰り返しで、しんどいことや嫌になることも多くあります。しかし当社が一番の強みは失敗にめげることなく、根気よく前向きにチャレンジする社員ばかりであることです。昔から品質にこだわり、一つ一つの製品を手づくりしている当社で、根気良く丁寧につくり込んでくれる社員、お客様の立場やご要望を第一に考えた丁寧な対応をしてくれる社員、縁の下で力持ち的に裏方に徹してくれる社員。全社員の力があって、ここまでやってこられたと思っています。一定規模の工場や各種設備も会社にとって必要な財産ですが、まさに社員が当社で最も大切な財産であります。



●今年（最近）の主な取組は

今年、国立京都国際会館に当社のスクリーンを納入・設置しました。もちろんスクリーン製造者の名前が世に出ることはありませんが、世界や日本の重要な会議が開催される場所で、私達が製造したスクリーンを使用して、議論やプレゼンテーション等が行われることは、とてもありがたいこともあり、誇らしいことでもあります。

また、学校へのスクリーン設置工事にも力を入れており、例えば、平成22年1～3月のわずか3か月間で大阪府下の公立高校138校へスクリーン3,115台の設置を完了しました。当社のスクリーンが、子供達の学習意欲・学習効率を高める一助になればと願っています。

●社長の経営理念、将来の夢は

会社としては、無理をしてどんどん規模を大きくしようとは思っておらず、また、売り上げも右肩上がりにどんどん伸ばしていけるとも思っていません。根幹にあるのは、お客様に喜んでいただけるもの、地域社会に貢献できるものをつくり続けたいとの気持ちだけです。そのためには、よりいいものをつくろうと、あきらめずにチャレンジし続けることが創業時から変わらない私の経営理念です。

私は団塊の世代であり、同世代は仕事から離れた生活を送っている方が殆どだと思います。私の場合は、今も現役で仕事をできることに生きがいと喜びを感じています。この歳で仕事を通じて地域社会と関わっていただけるのは、とても幸せなことだと、お客様や取引先をはじめとして、お世話になった方々への感謝の気持ちをもって、日々モノづくりに励んでいます。

また、私の財産は家族であり、家族同様の社員です。これからも社員や社員の家族が、日々を朗らかに楽しく生活していけるための会社であり続けたいと思っています。それが私の将来に亘る夢です。

<取材後記>

半世紀に亘りスクリーン製造一筋に歩んでこられた社長からは、ブレない信念と情熱を感じるとともに、様々なご経験やご苦勞に裏打ちされたお話しは、いずれも説得力のあるものとして、私の心に強く残りました。

一方で、技術的なことを知らない者に対しても、同じ目線に下りてきて、わかり易くお話し下さる丁寧で飾らないご対応に、私は恐縮しきりでした。

こうした社長のお人柄やお考えが企業風土として醸成されているのでしょうか。従業員の方は、皆さん元気に生き生きとお仕事をされておられ、とても活気あふれる現場でした。

そして、副社長の奥様の明るく、気さくなこと。取材は、終始笑いの絶えない和やかなムードのなかで進行しました。「営業面（の指揮）は副社長（奥様）まかせだよ。」とおっしゃられる社長のお言葉に奥様への揺るぎない信頼と愛情を感じ、奥様の公私ともサポートがあって、社長も安心してスクリーン製造に打ち込めるのだなと思いました。

（京都財務事務所財務課 I.Y）

掲載している情報は、平成26年12月時点のものです。

掲載している写真は、同社よりご提供いただいた写真又は同社了解のうえ同社ホームページ内の写真を掲載しております。